Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol. 16, No.1 (March 1993)

スポーツ活動からの離脱に関する文献的検討

A review of literature on withdrawal from sport activity

竹之内　隆　志*

Takashi　TAKENOUCHI*

The purpose of this study was to review literature on withdrawal from sport activity and to identify the problems in previous studies. The review was made from three points of view : the reasons of withdrawal, the determinant factors of withdrawal, and the theoretical model of withdrawal. As the result of review, the following problems and comments were suggested.

1) To clear the conceptual difference of sport dropout and sport trasfer.

2) To identify the critical factors of withdrawal from sport activity.

3) Sport dropout was defined as withdrawal from sport activities with feeling of aversion, and sport trasfer was defind as behavior which transferred from particular sport activity to another without feeling of aversion. Perceived physical competence and interpersonal relations were identified the critical factors of withdrawal.

Some ideas were offered for future research to make the sport withdrawal model.

1．緒　　言

運動選手のスポーツ活動からの離脱（withdrawal）の問題は、1974年にOrlick [37]が青少年の競技スポーツからの離脱率の高さを指摘して以来、スポーツ心理学の大きな関心事となっている。

スポーツを通した人間形成を目指す生涯スポーツの重要性が指摘される一方で、運動部活動の経験が将来のスポーツ参加を規定し[52]、スポーツ活動から離脱した者の中には、その後スポーツ活動に一切関与しなくなる者が存在している[32]。これらのことから、スポーツ活動からの離脱の理由やその規定因を明らかにし、離脱に至るプロセスを把握することは重要な課題であると考えられる。

このような課題に対して、これまでにいくつかの研究がなされてきている。しかしながら、スポーツ活動からの離脱行動のタイプとして、スポーツ・トランスファーやスポーツ・ドロップアウトがあり[30]、これらのタイプに対する概念規定があいまいであったり、これらのタイプを導く要因について理解された状況とは言い難い。そのため、スポーツ活動からの離脱に対する効果的な対処の方略も明らかにされていない。

スポーツ活動からの離脱を扱う研究においては、最終的にはその発生のメカニズムを説明する理論的モデルを構築することが課題である[13]。そこで、本研究ではスポーツ活動からの離脱を扱った従来の研究をレビューしたうえで、これまでの研究の問題点を整理し、今後の離脱研究の方向性を探ることを目的とする。

2．従来の研究のレビュー

スポーツ活動からの離脱を扱った従来の研究は、(1)離脱者の自己報告に基づいて離脱理由を調査したもの、(2)離脱者と継続者の種々の属性を比較し、離脱の規定因を明らかにしたもの、(3)理論的背景を有するモデルから離脱者の特性を検討したものなどに大別される。そこ

*　名古屋大学総合保健体育科学センター

*　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

で、上記の観点からこれまでになされてきた研究をまとめることとした。

1）離脱者の離脱理由を調査した研究

離脱者の離脱理由を調査した研究には、種目を限定せずに幅広く離脱理由を調査したものと種目を限定して離脱理由を調査したものがある。種目を限定せずに離脱理由を調査したものとして、SappとHaubenstricker[45]は、11歳から18歳の種々の競技者で来シーズンの参加を否定した者の離脱理由を調査し、「他の活動をする」、「勉強のため」、「面白くない」を明らかにした。Robertson[43]は、12歳の離脱者の理由として、「退屈である」、「楽しくない」、「うまくならない」、「きつい」、「興味がもてない」を報告している。また、Petrichoff [39]は、12-18歳の離脱者を対象として、上記以外の離脱理由の他に「怪我をした」を挙げている。また、中学生では「チームワークが悪い」、「新しい友達が得られない」などの社会指向的な理由が、高校生よりも重要な離脱理由であると指摘している。

我が国の文献に目をむけると、青木[3]は、高校運動部からの離脱者の第一理由として、「人間関係の軋轢（指導者や部員とうまくいかない）」、「他にしたいことがある」、「勉強との両立」、「怪我」が多く挙げられたことを報告している。また、稲地と千駄[25]は、中学生の部活動からの退部理由を因子分析し、「部機能の低下」、「交友分離不安」、「拘束」、「他の価値観」、「不平等」、「病気・怪我」、「学習の遅れ」、「技能向上の停滞」、「非レギュラー」を抽出している。

一方、特定のスポーツ種目からの離脱理由を明らかにしたものとして、Pooly[40]は10-15歳のサッカー選手の離脱理由として、「興味の葛藤」、「競争性の過強調（ミスをしたときのコーチからの叱責）」を挙げ、10-12歳児では競争性の過強調による離脱が13-15歳児より多いことを指摘している。Gouldら[14]は、10-18歳の水泳選手を対象とし、離脱理由の重要性を評定させ、「興味の葛藤」に関する離脱理由がもっとも重要性が高いことを明らかにしている。また、「楽しくない」、「他のスポーツに参加したい」、「思ったほど技術が延びない」、「コーチが嫌い」、「緊張感が嫌い」、「トレーニングがきびしすぎる」などの重要性も高く評定されていたことを報告している。また、BurtonとMartens[6]は、7-17歳のレスリング選手を対象として、同様な理由を挙げ、KlintとWeiss[30]は、上記の理由の他に、体操選手の離脱理由として「怪我」、「時間がとられる」を明らかにしている。

2）離脱者と継続者の属性を比較し、離脱の規定因を明らかにした研究

スポーツ活動からの離脱の規定因を明らかにする試みは、離脱者と継続者の種々の属性を比較することによってなされてきている。RobinsonとCarron[44]は、高校フットボール選手のレギュラー選手（starters）、非レギュラー選手（survivor）、離脱者を対象とし、個人的属性や状況的要因を比較した。その結果、離脱者の特徴として、「チーム所属感の低さ」、「自己のスポーツ経験を楽しくないと感じている」、「重要な他者である父親の励ましが少ない」、「コーチを専制的であると感じている」、「失敗を能力に帰属し、成功を努力に帰属しない」などの特徴を持っていることを明らかにしている。また、BurtonとMartens[6]は、レスリング継続者と離脱者を判別する要因として、「将来のパフォーマンス向上の期待」、「レスリングに対する重要性の認知」、「失敗事態での帰属傾向」の判別力の高さを指摘している。

一方、我が国においては、青木[3]が、高校運動部員の継続者と退部者の個人的属性や状況的属性を比較し、「レギュラー状態」、「練習の厳しさ」、「部活動での感動経験」、「指導者に対する満足度」などが両者を弁別する重要な要因であることを報告している。また、稲地と千駄[25]は、中学運動部員の退部理由を因子分析した上で、「部機能の低下」と「非レギュラー」が退部の予測因となりうることを指摘している。

3）理論的モデルから離脱を検討した研究

スポーツ活動からの離脱行動を理論的に説明

しようという試みは、離脱行動をスポーツに対する動機づけの低下とみなし、Harter[16,17]のコンピテンス動機づけ理論を援用する形で行われている。コンピテンス動機づけ理論では、人はコンピテンス（有能さ）を求める欲求によって行動に動機づけられものと仮定されている。そして、コンピテンスを高く認知することが子供の内発的な喜びに影響し、その後の達成行動を維持し高めることを仮定している。

Robertsら[42]は、9－11歳の競技スポーツに参加している子供と参加していない子供に、Harter[18]の作成した「認知されたコンピテンス測定尺度」を実施した。その結果、身体的コンピテンス尺度において、競技スポーツ参加者の方が離脱者より得点が高いという仮説どおりの結果を報告している。また、同一の尺度を用いて、12－18歳の競技スポーツ参加者と離脱者を比較したFeltzとPetlichoff[11]の研究や、7－17歳の競技レスリング参加継続者と中途離脱者の認知された能力を比較した BurtonとMartens[6]の研究、そして、大学生を調査対象として、身体的有能さの認知と運動部経験年数との関係を調べた伊藤[26]の研究などでも仮説が支持されている。

しかしながら、これらの理論的予測を支持しない結果も報告されている。Ulrich[47]は、5歳から9歳のスポーツに参加している子供と参加していない子供の身体的コンピタンス尺度得点を比較し、両群に差異がみられなかったことを報告している。また、高校運動部所属者と中途退部した離脱者の運動能力の認知得点を比較した青木[3]の研究でも、両群に得点の差がみられていない。

3．問題の所在

以上の研究の概観から、運動選手のスポーツ活動からの離脱を扱った研究は、離脱理由を抽出することから始まり、離脱者と継続者の種々の属性の比較、そして、動機づけ理論の援用という形でなされていることが明らかにされた。離脱理由の抽出や離脱者と継続者の属性の比較では、多くの理由や要因が離脱に関わっていることが示されている。しかしながら、多くの要因が明らかにされているがために、その要因間の関連性について統一的な解釈が困難となっている。離脱研究は、最終的に離脱行動の発生のメカニズムを説明する理論的モデルを構築することが課題である。そのためには、現在までに明らかにされた離脱に関わる多くの要因を整理し、離脱行動を発生させる中核的な要因を明らかにすることが必要である。

また、スポーツ活動からの離脱行動には、特定のスポーツから離脱した後に離脱者がとる行動によって、スポーツ・トランスファーとスポーツ・ドロップアウトという2つのタイプがあることが指摘されている[30]。従来の研究では、特定のスポーツから離脱した者を一律にスポーツ・ドロップアウトとして扱ってきたために、これらのタイプを導く要因について理解された状況とは言い難い。

そこで、本論では、離脱行動の概念規定と離脱に関わる中核的な要因について検討を加えることとする。これらの点から従来の研究を整理することによって、離脱行動を説明する理論的モデルの構築が促進されるものと考えられる。

1）離脱行動の概念規定

Orlick[37]は、一度競技スポーツから離脱した者の多くは、再びスポーツ活動を行なおうとしないことを報告している。また、McPhersonら[32]は、競技スポーツから離脱した者の約3割が、レクリエーション的スポーツにすら参加しないことを明らかにしている。そして、勝つことを過度に強調する競技スポーツの構造が、子供に心理的ストレスを与え離脱行動が生じるものとし、離脱率の高さを憂慮すべき問題としている。しかしながら、これらの指摘とは逆に、Gouldら[14]は、競技水泳からの離脱者の多くが、他のスポーツプログラムでスポーツ活動を継続していることを示し、離脱率の高さは単に自分に合ったスポーツ種目を求める選択の過程の現われで、特に問題視すべきことではないと結論づけている。

離脱率の高さについてのこれらの相異なる指摘は、青少年のスポーツからの離脱行動の概念規定の曖昧さによってもたらされているものと考えられる。KlintとWeiss[31]は、一度参加したスポーツ活動からの離脱行動を、離脱した後に離脱者がとる行動によって2つのタイプに区別している。すなわち、「今まで行ってきたスポーツをやめて、他のスポーツを行ったり、異なるレベルの同一のスポーツへ移るタイプ」をスポーツ・トランスファーと定義し、「今まで行ってきたスポーツをやめて、その後、二度とスポーツに参加しないタイプ」をスポーツ・ドロップアウトと定義している。この定義に基づくならば、OrlickやMcPhersonらはスポーツ・ドロップアウトの存在について報告し、Gouldらはスポーツ・トランスファーの存在について報告したものと考えられる。また、離脱率の高さを問題視すべきかどうかということについては、それぞれの研究対象の中に占める2つの離脱行動の出現頻度によって結論が導かれている。すなわち、スポーツ・ドロップアウトの多さを指摘したOrlickやMcPhersonらは、離脱率の高さをスポーツ参加に対するネガティブなものとし、スポーツ・トランスファーの多さを指摘したGouldらは、離脱率の高さを自分に合ったスポーツ種目を求めるポジティブな行動と考えている。

このように、離脱率の高さがスポーツ・ドロップアウトとスポーツ・トランスファーのどちらによるものかという議論は、離脱行動を理解するうえではあまり有益ではない。少数ではあってもスポーツ・ドロップアウトに該当する者が存在し、かつ、スポーツ・ドロップアウトをスポーツ参加に対するネガティブな行動と考えるならば、なぜ、ある者はトランスファーにとどまり、ある者はドロップアウトしてしまうのかという観点から検討することが必要であろう。つまり、それぞれを概念的に区別し、それぞれに影響する要因を明らかにすることによって、離脱行動全般についての意味のある結論が導かれると考えられる。

ところで、Klint らのスポーツ・トランスファーとスポーツ・ドロップアウトの概念規定は、離脱者の行動上の差異に基づいてなされている。あるスポーツ活動から離脱し、その後、スポーツ活動を再開するかしないかということは異なる行動である。しかしながら、離脱行動の中での問題行動を考える時、表出する行動上の特徴だけを捕えるのでなく、その行動を引き起こす内的な側面を捕えることも必要である。生涯スポーツの観点から考えると、離脱決定時にスポーツ活動に対して嫌悪感を伴っていたかどうかが、その後のスポーツ参加にとって重要であろう。あるスポーツから離脱したとしてもスポーツそのものに対する嫌悪感を抱いていないならば、その後のスポーツ参加は期待できる。しかしながら、スポーツそのものに対する嫌悪感を抱いて離脱してしまった者にはその後のスポーツ参加は期待できないであろう。

これらのことから、スポーツ・トランスファーを「スポーツ活動に対する嫌悪感はもっていないが、現在行っているスポーツ活動と他のスポーツ活動を比較した時に、相対的な好意度に基づいて他のスポーツ活動に移行する行動」とし、スポーツ・ドロップアウトを「スポーツ活動に対する嫌悪感を伴って、スポーツ活動全般から離脱する行動」と操作的に定義することが可能であると考えられる。このような操作的定義づけに関しては、今後様々な離脱のタイプを検討し、より明確なものにしていく必要がある。

2）離脱に関わる中核的な要因の同定

運動選手の離脱理由としては、「技能向上の停滞」、「面白くない」、「他のスポーツがしたい」、「興味の葛藤」、「勉強との両立」、「怪我」、「人間関係の軋轢」などが多くの研究から抽出されている。これらの離脱理由は、自己報告によって明らかにされたものであり、離脱に関わる要因を幅広く探索していくという点で有益な情報を与えてくれる。しかしながら、離脱の理由が数多く抽出されるために、それらの理由の統一的な解釈や、何が重要な理由であるのかということについては不明瞭となる。

また、スポーツ参加者と離脱者の様々な属性を比較し、離脱を規定する要因について検討した研究においては、「レギュラー状態」、「成功・失敗に対する原因帰属」、「練習の厳しさ」、「指導者に対する満足度」などが明らかにされている。これらの研究は、離脱行動に関連性の高い要因を明らかにするという意味において有益な研究である。しかしながら、規定力を検討するための要因の抽出はあくまで探索的なものであり、規定力が高い要因として同定された要因が、なぜ、離脱行動に高い関連をもつのかということまでは明らかにしていない。さらに、要因の抽出が探索的であるがために、規定力の高い要因として同定された個々の要因が、相互にどのような関連性をもっているのかということまでは検討されていない。

以上のような問題を解決していくためには、離脱に関連するものとして挙げられてきた要因を何らかの枠組みをもって整理し、離脱の中核的な要因を明らかにすることが必要である。これらの作業を行なうことによって、離脱行動の発生を説明する理論的モデルの構築が促進されるものと考えられる。そして、この課題を達成していく一つの方法が、理論的背景を有した上で要因を抽出し、その要因の離脱行動に対する影響を吟味する試みである。従来の研究のレビューの項で概観されたように、Harterのコンピテンス動機づけ理論を離脱研究へと導入した研究は、離脱の中核的な要因を検討するうえで有益である。これらの研究では、離脱者と継続者の「認知された身体的コンピテンス」に差異を認める結果が多く、自己の能力を低く推察することによって離脱が発生するものと考えられている。これらの結果は、離脱の理由として抽出された「技能向上の停滞」、「楽しくない」、「興味の葛藤」や、離脱の決定因として抽出された「レギュラー状態」、「失敗事態での原因帰属」などは身体的コンピテンスの概念によって説明されることを示唆するものである。すなわち、技能が向上しないことやレギュラーになれないこと、さらに失敗の原因を自己の能力不足に帰属させてしまうことが、自己の身体的コンピテンスを低く認知させ、その結果として、スポーツ活動に対する楽しさを喪失し他の活動へと興味を移行させるのであろう。このように身体的コンピテンスの概念は、自己報告によって明らかにされた離脱理由を包括的にまとめる有益な変数であると考えられる。

しかしながら、身体的コンピテンスの認知と離脱の関連性を認めない研究結果が見られていることについては注意が必要である。このような結果の不一致は、コンピテンスの判断基準や能力の概念の捉え方に起因しているものと考えられる。Nicholls[33,34]は、コンピテンスの判断の方法として、他者比較に基づく判断と自己の過去のパフォーマンスとの相対的な比較に基づく判断があることを明らかにしている。そして、この2つの判断基準のいずれを用いるかということが、その後の達成行為に影響すると指摘している。さらに、Nichollsによるとどちらの判断基準を用いるかということに状況要因が影響し、競争場面やテスト場面などでは、他者比較による判断基準が用いられやすくなる。JagacinskiとNicholls[27]は、この判断基準が用いられたときには、努力することによってパフォーマンスが改善されたとしても、他者のパフォーマンスよりも優れていなかった場合には有能感が感じられず、努力することが無意味なものと考えられるようになり、その後の行動がネガティブなものとなることを明らかにしている。これらのことを考慮するならば、Harter の認知された身体的コンピテンス尺度では、自己の能力の水準を判断するための情報源について明確な区別がなされておらず、そのために認知された身体的コンピテンスと離脱行動の関係を認めない結果が生じているものと考えられる。

また、Dweck[8]は、能力を変容可能なものと捉えるか、変容不可能なものと捉えるか、という能力の概念の捉え方の相違が、その後の達成行動に影響することを明らかにしている。このように、コンピテンスの高さのみを問題にするのではなく、離脱者がどのように環境を認知していたのか、どのような基準に基づいてコンピテンスを判断していたのか、さらに、能力をど

のように捉えているかという点を加味したうえで、身体的コンピテンスと離脱の関係を検討していく必要がある。

ところで、KlintとWeiss[30]は、スポーツ活動からの離脱行動をより理解するためには、スポーツ活動からの離脱動機を理解すると共に、スポーツ参加動機についても理解することが必要であると指摘している。そして、彼ら[31]は、8－16歳の体操プログラム参加者を対象に、参加動機と身体的コンピテンス、ならびに社会的コンピテンスの認知の関連について検討した。その結果、身体的コンピテンスを高く認知している子供は、技術の改善に関する動機と親和に関する動機を主な参加動機としており、社会的コンピテンスを高く認知している子供は、親和に関する動機を主な参加動機としていることを明らかにしている。そして、この結果から、身体的コンピテンスを低く認知していたとしても、親和に関連した社会的コンピテンスを高く認知していることによって、スポーツ活動を継続する者もいることを指摘している。この指摘は、身体的コンピテンスの認知に加えて、社会的コンピテンスの認知、すなわち、スポーツ状況での対人関係の様相が、スポーツ活動からの離脱行動へ大きく関わっていることを示すものである。そして、身体的コンピテンスと社会的コンピテンスの両方を低く認知した場合に、スポーツ活動からの離脱行動が発生しやすくなることを示唆するものである。

このように、スポーツ活動からの離脱行動に影響を与える要因としてスポーツ状況での対人関係に着目することは、スポーツ参加動機を扱った多くの研究で親和に関連した因子が抽出されていること[5,12,15,36]や、対人関係の軋轢が高校運動部からの退部者の退部理由を特徴づけるものであること[3]、さらに、補欠選手であっても親和動機によって大学運動部に所属し、継続しているものがいること[51]などからほぼ妥当なものであろうと推察される。

以上のことから、これまでの研究で明らかにされてきた離脱の理由や規定因をまとめていく変数として、「身体的コンピテンス」と「対人関係の様相」が有益であると考えられる。今後、身体的コンピテンスの発達過程やスポーツ場面での対人関係の成立に関わる要因を実証的に明らかすることが必要であろう。

4．今後の課題

本論文においては、従来の離脱研究がレビューされ、用語の定義や離脱に関わる中核的な要因の同定がなされた。これらの作業は、スポーツ活動からの離脱のプロセスを説明する包括的なモデルを構築していく第一段階として位置づけられる。

今後の課題として、本研究で同定された「身体的コンピテンスの認知」と「対人関係の様相」という要因を中核として、これに関連する要因を抽出し、スポーツ・ドロップアウトやスポーツ・トランスファーとの関連性についての検討がなされなければならない。すなわち、「身体的コンピテンスの認知」に関しては、コンピテンスの高さという量的な問題ばかりでなく、コンピテンスの捕え方や判断基準などの質的な問題を扱っていくことが必要である。また、「対人関係の様相」に関しては、その成立の過程などについてほとんど理解されている状況とは言えず、対人関係の成立基盤が明らかにされなければならない。これらのことを通して、スポーツ・ドロップアウトやスポーツ・トランスファーを産み出すプロセスを説明する包括的なモデルが構築されるものと考えられる。

また、スポーツ参加動機が発達的に異なり[5]、低年齢の子供においては、親和に関する動機が主な参加動機である[31]ことを考えるならば、離脱の発達差についても検討することが必要であろう。

参考・引用文献

1）Ames, C.,& Archer, J., " Achievement goals in the classroom ; Students' learning strategies and motivation processes", Journal of Educational Psychology, 80－3：260－267, 1988.

2）Andreas, V., & Keil, U., " The relationship be-

tween performance, intention to drop out, and intrapersonal conflict in swimmers ", Journal of Sport Psychology, 9：358－375, 1987.
3）青木邦夫「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」体育学研究,34－1：89－100,1989.
4）青木邦夫「大学生の競技スポーツ・キャリアとそれに関連する性格特性」体育の科学,41－6：481－485,1991.
5）Brodkin, P., & Weiss, M.R., " Developmental differences in motivation for participating in competitive swimming ", Journal of Sport & Exercise Psychology, 12：248－263, 1990.
6）Burton, D. & Martens, R., " Pinned by their own goals ; An exploratory investigation into why kids drop out of wrestling," Journal of Sport Psychology, 8：183－197, 1986.
7）Duda, J., " Toward a developmental theory of children's motivation in sport ", Journal of Sport Psychology, 9：130－145, 1987.
8）Dweck, C.S., " Motivation processes affecting learning", American Psychologist, 41－10：1040－1048, 1986.
9）Dweck, C.S. & Leggett , E.L., "A social - cognitive approach to motivation and personality ", Psychological Review , 95－2：256－273, 1988.
10）Elliott, E. S. & Dweck, C.S., " Goals ; An approach to motivation and achievement ", Journal of Personality and Social Psychology, 54－1：5－12, 1988.
11）Feltz, D. L., & Petlichoff, L., " Perceived competence among interscholastic sport participants and dropouts ", Canadian Journal of Applied Sport Sciences, 8－4：231－235, 1983.
12）Gill, D.L., Gross, J.B. & Huddleston, S., " Participation motivation in youth sports " , International Journal of Sport Psychology, 14：1－14, 1983.
13）Gould, D., " Understanding attrition in children's sport ", in Gould, D., & Weiss, M.R. (Eds.), Advances in pediatric sport sciences Volume Two, Human Kinetics：1987. pp. 61－85.
14）Gould, D., Feltz, D., Horn, T., & Weiss, M., " Reasons for Attrition in Competitive youth swimming ", Journal of Sport Behavior, 5－3：155－165, 1982.
15）Gould, D., Feltz, D., & Weiss, M., " Motives for participating in competitive youth swimming ", International Journal of Sport Psychology, 16：126－140, 1985.
16）Harter, S., " Effectance motivation reconsidered." Human Development, 21：34－64, 1978.
17）Harter, S., " A model of mastery motivation in children ; Individual differences and developmental change ", in Collins, A., (Eds.), Minnesota Symposium on Child Psychology (Vol.4) , Hillsdale, NJ：Erlbaum. 1981. pp. 215－255.
18）Harter, S., " The perceived competence scale for children." (Manual : Form O). Denver, CO：University of Denver. 1979.
19）Harter, S., " The perceived competence scale for children." Child Development, 53：87－97, 1982.
20）波多野義郎・中村精男「「運動嫌い」の生成機序に関する事例研究」体育学研究， 26－3：177－187,1981.
21）Horn, T.S., " Coaches' feedback and Changes in children's perceptions of their physical competence", Journal of Educational Psychology, 77－2：174－186, 1985.
22）Horn, T.S., & Hasbrook, C. A., " Informational components influencing children's perceptions of their physical competence ", in Weiss, M.R., & Gould, D. (Eds), Sport for children and youths , Human Kinetics. ：Champaign, IL. 1986. pp. 81－88.
23）Horn, T.S. & Hasbrook, C. A., " Psychologicai characteristics and the criteria children use for self - evaluation", Journal of Sport Psychology, 9：208－221, 1987.
24）今橋盛勝、林量俶、藤田昌士、武藤芳照（共編）「スポーツ部活」草土文化 , 1987.
25）稲地裕昭・千駄忠至「中学生の運動部活動における退部に関する研究：退部因子の抽出と退部予測尺度の作成」体育学研究,37：55－68,1992.
26）伊藤豊彦「原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響」体育学研究,31－4：263－271,1987.
27）Jagacinski, C.M. & Nicholls, J.G., " Conceptions of ability and related affects in task involvement and ego involvement ", Journal of Educational Psychology, 76－5：909－919, 1984.
28）Jagacinski, C.M. & Nicholls, J.G., " Competence and affects in task involvement and ego involvement ; The impact of social comparison information ", Journal of Educational Psychology, 79－2：107－114, 1987.
29）桂和仁・中込四郎「運動部活動における適応感を規定する要因」体育学研究,35：173－185,1990.
30）Klint, K. A. & Weiss, M. R., " Dropping in and dropping out ; Participation motives of current and former youth gymnasts ", Canadian Journal of Applied Sport Sciences, 11－2：106－114, 1986.
31）Klint, K. A. & Weiss, M. R., " Perceived competence and motives for participating in youth sports ; A test of Harter's competence motivation theory ", Journal of Sport Psychology, 9：55－65, 1987.

32) McPherson, B.D., Marteniuk, R., Tihanyi, J., & Clark, W., " The social system of age group swimming ; The perceptions of swimmers, parents, and coaches." Canadian Journal of Applied Sport Science, 5－3： 142－145, 1980.
33) Nicholls, J.G., "Quality and equality in intellectual development ", American Psychologist , 34－11： 1071－1084, 1979.
34) Nicholls, J.G., "Achievement motivation ; Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance", Psychological Review, 91－3： 328－346, 1984.
35) Nicholls, J.G., & Miller, A.T. " The differentiation of the concepts of difficulty and ability", Child Development , 54：951－959, 1983.
36) 丹羽劭昭・村松洋子「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究， 24－1：25－38,1979.
37) Orlick, T. " The athletic dropout ; A high price for inefficiently ", CAHPER Journal, 41－2：21－27, 1974.
38) Passer, M.W., " Children in sport ; Participation Motives and psychological stress ", Quest, 33－2： 231－244, 1982.
39) Petlichoff, L.M. "Motives interscholastic athletes have for participation and reasons for discontinued involvement in school sponsored sport", Unpublished master's thesis, Michigan State University, East Lancing：1982.
40) Pooley, J. C."Drop-outs from sport : A case study for boys age-group soccer", Paper presented at the Ametican Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance, Boston, MA： 1981.
41) Roberts, G.C., " Toward a new theory of motivation in sport ; The role of perceived ability ", in Silva, J.M., & Weinberg, R.S. (Eds.), Psychological Foundations of Sport, Human Kinetics. ： Illinois, 1984. pp. 214－228, 1984.
42) Roberts, G.C., Kleiber, D.A. & Duda, J. L., " An analysis of motivation in children's ; The role of perceived competence in participation", Journal of Sport Psychology, 3：206－216, 1981.
43) Robertson, I." Children 's perceived satisfactions and stresses in sport", Paper presented at the Australian Conference on Health, Physical Education and Recreation Biennial Conference, Melbourne： 1981, January.
44) Robinson, T.T., & Carron, A. V., " Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport ", Journal of Sport Psychology, 4：364－378, 1982.
45) Sapp, M., & Haubenstricker, J., "Motivation for joining and reasons for not continuing in youth sport programs in Michigan", Paper presented at the meeting of the American Alliance for Health, Physical Education, Recreation, and Dance, Kansas City, MO：1978.
46) 城丸章夫・水内宏（編）「スポーツ部活はいま」青木書店 , 1991.
47) Ulrich, B.D., "Perceptions of Physical competence, motor competence, and participation in organized sport ; Their interrelationships in young children", Research Quarterly for Exercise and Sport, 58－1 ：57－67, 1987.
48) Weiss, M.R., & Horn, T.S., " The relation between children's accuracy estimates and achievement - related characteristics ", Research Quarterly for Exercise and Sport, 61－3：250－258, 1990.
49) Weiss, M.R., McAuley, E., Ebbeck, V., & Wise, D.M., " Self - esteem and causal attributions for children's physical and social competence in sport", Journal of Sport & Exercise Psychology, 12：21－36, 1990.
50) White, R.W., " Motivation reconsidered ; The concept of competence ", Psychological Review , 66－5 ：297－333, 1959.
51) 山本教人「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」体育学研究,35：109－119,1990.
52) 山口泰雄・池田勝「スポーツ社会学の最近の研究動向１－スポーツの社会化－」体育の科学,37：142－148,1987.

(1992年12月４日受付)